

JELA NEWS

ジェラニュース 第37号 2015年8月15日発行 発行責任者 森川 博己

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言っておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節～36節、40節



ブラジルに「愛と忍耐の音楽ミニストリー」誕生!

JELA はブラジル子ども支援として、日系人を中心とする現地のサンパウロ教会（牧師＝徳弘浩隆 JELC 派遣宣教師）が推進する、子どもたちへの音楽教育プロジェクト「AMILU」を今春から支援しています。「AMILU」は、Aula de Musica da Igreja Luterana（「ルーテル教会音楽教室」という意味）の略です。友だちを意味する「AMIGO」にも似ていることからプロジェクト名に決まったようです。この「AMILU」で子どもたちが使用する楽器購入の費用を JELA は支援しています。（2 頁につづく）

【この号にはこんな記事が】

ブラジルでの音楽教育ミニストリー（徳弘浩隆） ……2 国際青年交流奨学金「すべての必要を満たしてくださる神様」（ラブリー・リリー・シドニー） ……3 リラ・プレカリア「光を届けられますように」（早野潤子） ……4 難民問題への政治経済的側面からのアプローチ（有馬みき・山本哲史）、リラ・プレカリア研修講座受講生募集 ……5 インド・ワークキャンプ感想文一覧 ……6～7 チャリティコンサート報告、第四回川柳ひろば入選作発表、編集余話、支援者一覧 ……8

「愛と忍耐の音楽ミニストリー」誕生!



(1 頁からの続き)

以下に、なぜこのミニストリーが大事なのか、徳弘浩隆宣教師に説明していただきます。

◇貧しい子どもに音楽?

「貧しい地域の子どもたちに音楽を教えるって何になる? もっといろいろやることあるのでは?」と考える方がおられるかもしれませんが、子どもへの音楽教育にこそブラジル社会が抱える問題解決の糸口があると私は確信しています。

ブラジルは多くの可能性とともに、問題も抱えた国です。人種差別は少ないと言われていますが、貧富の差が激しいのです。貧しい地域の人たちは、その日暮らしをしています。学歴がないと就職機会も少なく、たとえ就職できても安月給です。

公立学校は半日しか授業がなく、学級崩壊状態の学校が多いので、そういう学校を卒業した大人には、正しく読み書きができない人がいます。また、公立学校には音楽の授業はなく、「音楽＝富裕層」という意識が強いです。日本と違いブラジルでは、音楽は裕福な家の子どもが私立学校や放課後に塾などで特別に習うものなのです。

そんな地域の子どもたちに教会施設で音楽教育を施そうと思ったのは、静か

に人の話を聞き、他人と調和できる人間を育てたいからです。音楽から得る感動や達成感、自尊心を養う大きな助けになるのです。「少額でも自分で授業料を払い、自分に投資すれば、将来を変えることができる」、こういう地道な生き方を、音楽を通して教えるのがこのミニストリーのねらいです。

◇JELA の支援でそろえた楽器

「AMILU」は JELA の支援で電子キーボード、ギター(フォーク、クラシック)、リコーダー(テナー、バス、アルト)、アンプをそろえることができました。また楽譜も購入しました。インフレの激しいブラジルでは楽器は高価ですが、ミニストリーのスタート段階で最低限のものを購入できたことは音楽教室運営の弾みになりました。JELA をはじめ、ブラジルを支援してくださる皆様に心から感謝いたします。

◇忍耐と愛が試される日々

音楽教室を始めてから明らかになった問題もあります。ブラジル政府は、貧しい地域に十分過ぎる生活支援を行っています。そのため、大人は支援を権利のように考え、与えられることに慣れてきています。ある親は、二人の娘を私たちの音楽教師にしばらく通させた後、「メリッ」がすぐに出てこないことに耐えられ

ず、楽器や楽譜を返却して娘を辞めさせました。しかも、わずかな授業料も返してほしいと言ってくる始末です。

砂に水を注ぐような、砂をかむような虚しさや苦しさを味わうこともしばしば。数人増えては数人来なくなり繰り返す、一喜一憂の日々です。私たちの愛と忍耐が試されています。

◇大きな飛躍のために

音楽教室は、サンパウロ教会のメロ牧師が担当しています。先生は音楽的素養があり、このミニストリーにうってつけです。教室では、ギター演奏や日本語での合唱を希望する者も現れました。折しも教会の聖歌隊の日本語指導も必要と感じていたのですが、ブラジル住まいの日本人の音楽教師の方が候補として見つかりました。その方が加わってくだされば勢いにつき、音楽教室も本格稼働すると期待しています。引き続き、ブラジルのため祈りとご支援をよろしく願いいたします。

*この音楽ミニストリーの近況をジェラニュースや JELA ホームページのニュースブログで随時お分かちします。今回の記事を読んで共感を抱かれた方は、ミニストリーを支えるためのご寄付を「ブラジル子ども支援」をお願いいたします。

国際青年交流奨学金

JELA は毎年何名かの方に、将来日本や世界をよりよくするために活躍していただくことを願って奨学金を提供しています。今回は受給者の一人、現在テンプル大学日本校で国際関係学を学んでいるラブリー・リリー・シドニーさんからの便りをご紹介します。

すべての必要を満たしてくださる神様

ラブリー・リリー・シドニー
テンプル大学日本校学生



○日本育ち

私は日本で生まれましたが、ナイジェリア人の母子家庭という環境で育ちました。高校までは日本の学校に通ったので、ナイジェリア育ちの母と違って日本の文化・言語を抵抗なく自分のものにしていくことができました。でも、外見が違うということで「アイデンティティ」の壁にあたったり、学校生活で辛い思いをしたりすることもありました。

○生活と信仰

幼い頃から日曜には母と教会に行き、イエス様の存在は常に感じていましたが、それと自分の生活を結びつけることはあまりなかった気もします。中学・高校と学年が上がるにつれ、いろいろな人と関わるようになって、さまざまな誘惑に立ち向かう際に、自分はクリスチャンとしてどのようにノンクリスチャンである友達と向き合っていけばいいのか、少しずつ意識するようになりました。

○まさかのサプライズ

数年前にテンプル大学日本校に入学しましたが、学費を払い続けるのは母子家庭である私たちには悩みの種でした。そして去年の秋からは、母がアフリカのブルンジに移り住み、現地の学校で働く

ことになりました。私は日本に残りたかったのですが、肝心の学費をどうするか決まっていませんでした。母が日本を待つまで時間もなく途方にくれていたときに、JELA の奨学金をいただけることが決まったのです。私にも母にも夢のような出来事で、神様が本当に思いがけない方法で働いてくださることを実感しました。

○大学での貴重な学び

大学では国際関係を専攻し、世界の国際関係事情を政治・歴史・経済・文化などさまざまな視点を通して学び、世の中に貢献できる力を身につけています。日本の大学とは違い、企業や公的機関でのインターンシップもカリキュラムに組み込まれ、語学力や協調性などを養うことのできる大学だと思っています。アルバイトも含め日常では日本語を使うことの多い私にとって、英語だけを使用するテンプル大学は、勉強をしながら英語力がつけられ、多国籍の生徒たち・先生たちと関われる貴重でかけがえのない場所でもあります。

○クリスチャンとしての活動

さらにテンプル大学は、自分自身に正直でいること、自分の本来の姿を恥じないことの大切さを教えてくれました。学生はみんなとてもオープンで、周りに流されず自分自身に誇りを持っている人

が多いです。そんな人たちに囲まれて過ごしていく中で、自分の本来の姿である神の弟子(クリスチャン)であることをもっと外に出していくべきだと思い、学校の外では SI (スチューデント・インパクト) という、複数大学の学生で構成する学生クリスチャンのサークルにも参加しています。同年代のクリスチャンと賛美をして交流する機会を与えられていて、心身ともにこの厳しい社会の中で生きていけるように鍛えられているのだと感じています。

○卒業後の希望

大学卒業後は、JELA のようなボランティア活動を支援している団体や国連などで、英語を活かしながら、特にアフリカ諸国などの発展途上で助けを必要としている人々のために働きたいと思っています。新約聖書のテモテの手紙二の第 4 章にあるように、今私たちは大変混乱した時代に生きています。何が本当なのか、区別するのが難しいことも多いです。しかし、クリスチャンに出来ることは神の愛を伝えていくこと、良い知らせを私たちなりのベストな方法で語るのだと思います。

今の私に必要なすべてを与えてくださっている神様、そして JELA に心から感謝します。



リラ・プレカリア（祈りのたて琴）

苦しみの中にある人に寄り添い、そのベッドサイドでハーブと歌による祈りをお届けする奉仕者を、JELAは2年間かけて養成しています。現在までに二十数名の方がこの講座を修了し、病院・施設などさまざまなところでご奉仕されています。今回は、2014年4月から始まった第5期研修講座を受講中の早野潤子さんに、これまでの学びの意義と、9月からスタートする実習への思いをつづっていただきました。

光が届けられますように
—リラ・プレカリアの学びを通して
リラ・プレカリア第5期生
早野潤子



患者にバストラル・ハーブを奏でる早野さん

第5期リラ・プレカリア研修講座の受講生として1年余。先生方や修了生の先輩方の真心のこもった導きや、JELA事務局スタッフの皆様の心強いサポートをいただき、同期生6人の仲間たちと信頼の絆を深めながら学ぶ日々は本当に充実しており、恵まれた環境に心から感謝をしています。

奈良の自宅から東京まで、親戚の家に泊めてもらいつつ、夜行バスでほぼ毎週のように往復する生活は、体力的にもハードで（ハーブ練習で出来る指のマメより先に、キャリーバッグを持つ掌にマメができてしまったり）、また精神的にも必ずしも順調なことばかりではありませんでしたが、歌とハーブの個人実技レッスンの他、音楽の内容を掘り下げるために聖書の詩篇を読み深めたり、カウンセリング講座で学



ジェラホールで模擬実習に余念のない5期生の皆さん

んだりする中で、心身に苦しみや痛みを持つ人に仕える者として、まず自分自身が徐々に整えられていきました。

また、個性豊かなバックボーンを持つ受講生同士が、日々の中で意見を出し合いさまざまな視点からの気づきをかち合えることは本当に貴重で、それぞれに与えられた賜物を発揮して互いに支え合えるこのメンバーは、出会うべくしてここに集められたんだなあと感じます。この信頼のサークルこそが、キャロル先生が繰り返しておっしゃっておられる、「リラ・プレカリアの働きは、『あなたは、愛されている大切な存在ですよ』と、一人ひとりに寄り添うこと」を、まさしく体現する血の通ったダイナミックな学びの場になっているのだと思います。

さらに、実際の奉仕の場へ見学に行かせていただいたことも大きな体験でした。患者さんが音楽を聴かれて洗い流されたように穏やかな表情に変わられたり、ご年配の方が幼い子どものように安心した様子で寝入られたり。その場にハーブの響きと何より人の声が祈りと共にあるとき、奉仕をする一人を超えて何かが働き、自分を無にして患者さんの呼吸に寄り添い歌う人の存在を通して、暖かな光につつま

れるような聖なる波動が満ちるのが体感できました。

人は病氣や死のような危機に向き合うとき、それまでの人生では気づかなかったようなスピリチュアルな痛みを感じるものだと思いますが、かつての自身の病氣や、リラ・プレカリアの学びと同時進行で、リアルタイムな実践の場となった父の介護の体験を通して、その闇に身を置くからこそ見えてくる光が確かにあるのだと気付かされました。その光を、祈りの音楽を通して届け、あるがままの存在を認め愛すること、その大なる実践に招かれていることの、恵みの深さを受け止めています。

いよいよ9月からの最終学期は、現場での実践研修も始まります。私たちの祈りの歌とハーブがお一人お一人の魂に寄り添い、神様の「平和の楽器」として用いられますように。

リラ・プレカリアでは、2016年4月から2年間で実施予定の第6期研修講座の受講生をこの秋から募集します。ご興味のある方は、右の「リラ・プレカリア研修講座受講生募集」をご参照ください。なお、募集情報その他のリラ・プレカリア関連情報は、JELAホームページのニューズブログ欄にも随時アップしています。

難民支援

東京恵比寿のジェラホールはJELAの事業に関係するさまざまな催しにご利用いただいています。2015年春には社会福祉法人日本国際社会事業団主催による難民保護の勉強会に使っていただきました。この会は同事業団による笹川平和財団助成実施事業「国際的保護の包括的構想：概念化と政策提言のための議論枠組の提案」の報告会を兼ねたものでした。以下、当日の勉強会を主導なさったお二人の学識経験者によるレポートです。

難民問題への 政治経済的側面からのアプローチ

神奈川大学法学研究所 客員研究員
有馬 みき / 山本 哲史



去る3月、難民の保護はどうあるべきかについて、大学教員やNPO関係者など専門家18名が参加して勉強会が催されました。東京大学（注）で難民問題を専門的に研究してきた2名の講師（有馬みき、山本哲史）が報告し、ついで、活発な意見交換が行われました。会場をお貸しいただきました日本福音ルーテル社団（JELA）さまには、関係者一同、この場をお

借りし心よりお礼申し上げます。

欧州では、シリア難民などを含むボートピープルは地中海を渡ろうとするわけですが、その数は2014年だけで22万人に及び、これに対してイタリアなどの沿岸国は軍艦を派遣して取り締まりを強化しています。報道はこうした事実を伝えるものの、その背後にある根本的な疑問（なぜ難民を追い返そうとする国があるのか）については一般的にはあまり理解されていないようです。というのも、難民を助けようとする人々の考えは、多くの場合良心に基づいているからです。そのこと自体は望ましいことであるとしても、逆に、難民問題を政治経済的に捉え、損得勘定を堂々と議論することは避けられてきました。

この勉強会は、こうした状況を踏まえ、難民問題について法や倫理だけに頼らず、政治経済の角度からも問題を包括的に検討し、有識者の共通認識としての現実的な解決策や、日本のあるべき立ち位置を提示すべく、その出発点として企画されました。

研究論文や各種の報告書などを手がかりに、世界各地で難民の問題が政治経済的な側面からはどのように捉えられているのかを理解しようと試みるなかで、一つのキーワードを定めました。それが「国際公共財」です。公共財というのは、公園などが典型的な例になるのですが、誰が

使っても構わないわけです。また、誰にも独占はできないのです。しかも、お金を払わずとも使えるため、誰かが公園の整備をしなければならないはずなのに、自分以外の誰かがその世話をしてくれるだろう、ということに皆が考えがちになるために、放っておくと整備がおろそかになるという特徴があります。

難民の保護も同じです。いずれの国も、どこか別の国が難民を保護するであろうと考えがちになり、特に経済が停滞し、外国人を受け入れる余裕のないような社会では、難民になど関わりたくない、関わらずとも誰かが保護すればよいではないか、という考えが支配的になるわけです。

ですが公園も、それを整備するための仕組みがうまく設計されれば、予算をかけずともきれいに維持管理されるはずですが、そのための仕組みの設計は、利用者それぞれが自然と世話をしたくなるように、個々人の損得勘定をうまく誘導することが成功の鍵となります。いうまでもなく、そのためには公園の整備をしようという人が何を個人的な利得と考えるのかを明らかにしなければなりません。今回の勉強会は、その初回の取り組みとして、難民問題について貢献しようとする国や組織にとっての利得が何なのかを追求し、あるいは逆に何が負担と考えられているのかを明らかにすることが必要であることを指摘した研究や事例を紹介し、この問題に関心の高い関係者間で意見交換することを試みました。

これまでの研究にはない着眼点から活発な意見交換がなされました。今後、さらに多様な専門家の皆さまの見解を集約し、多角的に難民問題を捉え、ゆくゆくは成果をまとめて政策提言につなげてゆくことを目指しています。

（注）執筆者はお二人とも、この報告会開催当時は東京大学の研究員でした。

悩み苦しむ人にハーブと歌の祈りを！ リラ・プレカリア研修講座受講生を募集します

あなたもハーブと歌で神様の愛を運びませんか？ JELAは「リラ・プレカリア（祈りのたて琴）」第6期研修講座（2016年4月～2018年3月）の受講生を募集しています。リラ・プレカリアは、病床にある人や、さまざまな問題で悩み苦しむ人に、ハーブと歌による祈りをお届けするボランティア活動です。

受講に際して、宗教・国籍・年齢などの制約はありませんが、講座全体がキリスト教を基礎とし成り立っています。講座修了には2年間を要し、入学金・受講料の合計は100万円です。また別途、自宅での練習用のハーブ（一台40万円から）をご用意いただく必要があります。

お問合せは、日本福音ルーテル社団（JELA）リラ・プレカリア事務局（電話03-3447-1521 / 担当＝奈良部くならぶ）まで。



インド・ワークキャンプ参加者レポート

今年の2月にJELAはインドのCRHP(注)でワークキャンプを開催しました。義足作成を中心とする11日間のプログラムに計13人の参加をいただき、その第一報として森奈生美さんの感想を前回のジェラニュースに掲載いたしました。今回は他の12人のレポートのエッセンスにあたる部分を、内容ごとに分類してご紹介します。

なお、全レポートの詳細は、JELAホームページのニュースブログ欄

キャンプを通しての変化・実感

●石間優仁香(大学生)



HIV に感染をした女性と最後にハグをして別れることができました。しかし知識が乏しかった私は、HIV に感染するのはどのような経路があるのだろうと疑問に思いました。ハグをしていいのか、キスをしていいのか、感染しないということが分かっている一瞬ためらってしまった自分の小ささを感じました。

その中で感じた今の私に足りないものは、目の前にいる人の痛みの中に留まる力です。私は、その人が話す言葉の中に隠れている悲しさや辛さを垣間見ても受け止めきれず、真剣には考えずに流してしまうことがあります。私はその人ではないから同じ経験をしたとしても感じることは違うし、共感することなんてできないと思ってしまいます。だけど、その人が話をしてくれたという事実を受け入れることが大切だと思いました。

●針田真由子(大学生)



インドで毎朝、礼拝に出席することができました。その礼拝に来ている人の中にはクリスチャンではない人がきつと多くいたのだらうと思います。

「ワークキャンプ」の項の4月1日付記事「インド・ワークキャンプ2015参加者のレポート一覧(まとめ)」からご覧いただけます。
<http://jelanews.blogspot.jp/2015/04/2015.html>

(注) CRHP="Comprehensive Rural Health Project"の略で、総合的地域健康プロジェクトを意味する非営利活動団体の名称。

しかし、みんなと同じ礼拝を持ち、祝福され、私はこれらのすべて人の中に平等に神様がいらっしゃるということに改めて気づき、実感しました。私は今後いつ洗礼を受けるか全くわかりません。しかし、神様を信じるという心はいつまでも決して変わりません。

●沼部真奈(大学生)



(キャンプをした場所を管理する組織)CRHP内の女性が、与えられた仕事を笑顔でこなし、私たち異国人にも、まるで現地の人のように関わってくれた一方、スラム街の女性や、恐らく異国人がいるからという理由でCRHPに勝手に入りこんで「現金を下さい」とお願いする女性の姿を見て、施設の外と中で存在する女性の差を感じました。

現代の日本では、普通に生活している分には性差を感じることはほとんどありません。今回のワークキャンプを踏まえて、自分が女性として生まれたからこそ日々の生活の中で女性であることを大切にしていきたい、と感じました。

●井上祐子(社会人)



ミーナ先生からは「与えることの素晴

らしさ」について教えられました。ミーナ先生の腕にはまっていたブレスレットがとっても素敵だったので、「私もこんなのを買いたいのですが、どんなふうにサイズを決めるのですか?」とお尋ねしました。先生はすぐ自分の腕からブレスレットを外して私の腕に嵌めて「とらないでいいよ、そのままにしておいて」と言いました。私はもうびっくりでした。水も電気も物資も日本ほど豊かでない国の方が見ず知らずの私に下さるなんて! 何にも持っていなかった私は、とてもドギマギしてイヤリングを外し、もらっていただきました。

新たな使命感

●マイク・シェロ(青山学院宗教主事)



CRHPの働きに接して、私は謙遜にさせられ、目が開かれました。彼らは激貧の人々に注目し、極めて困難な環境の中でも明るさを失わずに奉仕しているのです。何人かと話しながらスラム街を歩いたとき、そこに住む人々の生活の貧窮度を聞かされた私は涙を禁じ得ませんでした。心が震えました。そこに住む人も自分も同じ人間だという思いに突き動かされたからです。

地理的には遠く離れていても、私たちは人間としては一つの家族なのです。家族なら、互いのために、互いを思いやる心で、自分の全力を振り絞って助け合うべきです。

●河西雪菜(大学生)



私は、今までキャンプやボランティア活動に参加させていただくとき、自分が変わりたい、自分の学びとしたいなど、自らの変化を一番に考えていたように思う。もちろん、今回のキャンプでも将来を考えるきっかけ、自分を見つめ直す機会となったが、それよりも、今、目の前にいる人のために私には何ができるか、私がすべきことは何かを、より深く考え感じることができた。自分に与えられている恵みを、ただ自分のモノとするのではなく、目の前の困っている人のために使う、実際に行動することは難しいことだが、微力だけど無力ではないということを感じて今後も歩んで行きたいと思う。

●細西賢輔(大学生)



私は海外で仕事をしたいという夢がある。今までは、かっこよさそうだからなどという薄い考えで海外に飛び出したと思っていた。しかし今回のワークキャンプで、こんなにも良い環境で日本で生活させてもらっている私は恩返しを世の中にしなければならぬ、という使命感を感じた。少しでも世界の困っている人々を笑顔にできるような、CRHPのように、「栄養、愛情、教育」を広めるようなことを行える人間になりたいと強く感じた。

協働の大切さ

●大柴佳奈(大学生)



今回のメンバーは年代もバックグラウンド

もさまざまで、だからこそ日々新しい発見をし、多くのことを学ぶことが出来た。自分が困難だと感じていなかったものが、他の人からすれば困難であるかもしれないということ。また自分が嫌だと思っていたことが、相手からすれば嫌な気持ちになるようなことかもしれないということ。私がこれまで着目すらしてこなかったことの一つ一つが、国や年齢の違う方々と一緒に生活する中で見えてきた。今回のキャンプでこのメンバーだったからこそ学べた新しい価値観や観点も多かったという点で、やはり神様の働きを強く感じた。

●勝部久子(社会人)



幼稚園の保育室の内壁にスライドを使って下書きしたゾウ、キリン、ニワトリ、シマウマ等々の動物たちに色を塗るのですが、ペンキが垂れてくるのをシンナーで拭き落しながらの作業です。最後までやりたいと思いながら時間が来た次の仕事場への移動でした。途中でバトンタッチした色塗りも次のメンバーが上手に仕上げしてくれ、思った以上の出来映えを見ると、一人でやり遂げたことよりもお互いが連携して仕上げている喜びの方が大きかったです。

支援のあり方

●江藤陽子(社会人)



帰国してすぐ、ある男性と出会った。彼はいつも私が利用している駅で、小銭をせびっているホームレスの男性であった。彼はいつものように駅の利用客に小銭をくれと手を出していた。その姿を見て、私ははっとした。私は今まで、そのような人に出会うとお金や食べ物をあげていたが、それはその場しのぎにしかならず、彼をその状況から救い出すことにはならないと気づかされたからで

ある。その時私は、CRHPがしている「支援」の意味を体感した。本当の支援とは、その人に耳を傾け、本当の必要を満たし、その人が「人として生きていくことができるように応援していくこと」である。

●田中仁恵(社会人)



私はこのキャンプに参加するまでCRHPの存在を知りませんでした。CRHPの活動は医療だけにとどまらず、教育や農業、それに伴うさまざまなことを行っています。

素晴らしいと思ったのは、例えば農場では、ただ自家栽培し与えるのではなく、そのノウハウを村民に教え彼らでそれが出来るよう指導していること。そのためにもどのような作物が土地に合うか研究を重ねていること。恵まれない方に与えるだけでなく、生活をしていけるようにするという根本的な問題解決のあり方に、今までの自分の考え方を改めさせられる部分もありました。

●井上秀樹(社会人)



CRHPは素晴らしい働きをしています。「貧困」ということを、単にお金や食料の援助ということだけでなく、将来を見つめて上流から総合的に対策していこうとしているまさに「COMPREHENSIVE」な活動に改めて感動しました。

チャリティコンサート報告

第12回世界の子ども支援チャリティコンサートを5月9日～7月5日、全国11の日本福音ルーテル教会を会場に行いました。来場者数は約900人、約91万円の献金をいただきました。ご来場いただいた皆様、そしてご協賛・ご後援くださった企業・個人の皆様、ありがとうございました。

今回の奏者は、おなじみの上野由恵さん(フルート)と、2年ぶりに新井伴典さん(ギター)にお願いしました。プログラムは、新井さんが編曲したラテン系の曲を中心に構成され、各会場で喝采を浴びました。上野さん、新井さん、素晴らしい演奏をありがとうございました。

また、岡崎教会、熊本教会、鹿児島教会では青少年らと交流・ワークショップを持つこともでき、コンサート会場でも「子ども支援」の実践ができたことを嬉しく思っています。

【開催会場】

- 5月9日(土) 岡崎教会
- 5月10日(日) 保谷教会
- 5月22日(金) 小鹿教会

- 5月23日(土) 藤が丘教会
- 5月29日(金) 甲府教会
- 6月12日(金) 熊本教会
- 6月13日(土) 鹿児島教会
- 6月14日(日) 長崎教会
- 6月27日(土) 刈谷教会
- 6月28日(日) 松本教会
- 7月5日(日) 神戸東教会

【ご協賛企業・団体名】

三井不動産リアルティ株式会社/株式会社ハリファックスアソシエイツ/シュローダー・インベストメント・マネジメント株式会社/前田建設工業株式会社/西村建築設計事務所/有限会社リフォーム・イケ/野村證券株式会社/株式会社マイスターエンジニアリング/本郷学生センター/伊達工業所

【熊本地区ご協賛企業・団体名】

近代経営研究所/米白餅本舗/株式会社徳一/ネットヨタ中九州株式会社/肥後銀行/ビラージュ/フェリシア/石橋葬儀社/ホテルメルパルク熊本/九州学院/九州ルーテル学院/株式会社ヨネザワ/東光石油株式会社/福田病院/葬祭ディレクター杉野/お風呂のシンドー/アールエスエス/金井クリニック/太陽堂薬局/ニューコ・ワン/寺原自動車学校/カーリーノ/熊本機能病院/

(後援)

熊本日日新聞/RKK熊本放送/水道町親和会以上、順不同

子、京谷信代、JELC釧路教会、工藤達晃、倉知延章、グレイ正子、小泉小枝、社会福祉法人国際社会事業団、小島拓人、権藤久喜、斉藤ひろみ、坂根耀子、清水昭子、JELC下関教会、庄司和正、小丸吉展、鈴木辰典、鈴木やす、聖望学園マイクル・ピースカ、関淑子、関口佳子、千石真理、高尾堯、高田紀子、高津和子、高橋愛子、高橋進、高橋悠美子、高橋要子、JELC玉名教会、轟信治、中巳代、中井照美、中井奈津子、中岡一秀、中山純郎、仲吉智子、那須幸、西立野園子、西千恵、二村澄雄、野口英子、野口玲子、野田千恵子、浜松コミュニティ音楽療法研究会・山田美代子、早瀬康平、原田美知子、畔柳美佐子、永井幸恵、福田昌代、藤井真理恵、藤本紀子、古庄理世、Mark Vinge、JELC稔台教会女性会、JELC稔台教会を1席上献金、牟田青子、森宣道・若奈、森涼子、森田七三郎、森田雅子、森保宏、八坂由貴子、安みぎわ、山県順子、山口初子、山本直子、山本一男、山本了、ローラ・フェイトス、若原奇美子、世界のこども支援チャリティコンサート席上献金(日本福音ルーテル岡崎教会、保谷教会、小鹿教会、藤が丘教会 以上、5月末までに入金があった教会のみ)

他匿名複数

ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

【編集余話】

DVD『魂の教育 エル・システム～音楽は世界を変える～』を観た。1975年にベネズエラで始まった子どもたちのクラシック音楽教育に関するドキュメンタリーである。昼間から犯罪に走り、銃と麻薬に手を出すなど、劣悪な環境で暮らすベネズエラの子どものために、国が後押しして展開するエル・システム。今では世界50か国以上が採用し、日本でも大震災後に南相馬市で発足した。DVDは、ベネズエラ貧困層の子どもが仲間と演奏することで人生に希望を見だし、真剣に生きる姿を感動的に描く。サンパウロ教会(徳弘浩隆宣教師)が始めたブラジル貧困児童への音楽教育はエル・システムではないが、音楽する喜びを育み、合奏を通じて協調性を養おうとする点で共通している。JELAはその目的に賛同し、楽器購入費をサポートすることにした。皆様からの財的支援を得て働きが充実・拡大するよう願っている。(M)

第4回川柳ひろば入選句発表

下の三句が選ばれました(柏木哲夫・選)。お二人には近日中に景品をお送りします。

〈最優秀賞〉

ご自由にしてと言われる不自由さ(羊野さんぽ)

〈優秀賞〉

かき氷隠し事にも少し沁み(相模秋茜)
重ね塗り止めどき迷う絵と化粧(羊野さんぽ)



今回の投句分には次のような作品もありました。(柳名略、景品なし)

よみきかせ絵本に聴いて教えられ
聞き疲れいやし求めて神に聴く
きよい主の光の道の影のなし
記憶力減った分だけ増す感動
読みすぎて詠もうとしても真似になり
日なたぼこイエス様とお話す
笑顔だね通じなくても通じるね
うなぎ屋の煙がおいでおいです
ご飯よと呼ぶ姉どこか亡母(はは)に似て

朝起きて夫(つま)と讚美でポケ防止
「死ぬ前に」がペンテコステに受洗する
譲り受け我が家の遺産笑いな
横柄に弁解「肅々」は使わぬと



投句はJELA「川柳ひろば」まで。詳しくはJELA事務局がホームページの「川柳ひろば」欄でご確認ください。ホームページには川柳情報を随時アップしています。
川柳ひろば管理人・森川博己

支援者一覧

(2015年2月1日～5月31日)
浅見正一・君江、安藤淑子、市原正幸、ウエスト東京エオンチャ、JELC大岡山教会学校、大河原留美、JELC大阪教会(LOVEコンサート席上献金)、太田立男・泰子、大谷忠雄・妙子、大塚眞佐子、大嶺裕司・可代・十六夜、岡部端子、加藤裕子、兼岩恵美子、神谷智子、河野悦

JELAの活動にご支援を!
各種献金のご送金は下記をご利用下さい。

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
Email: jela@jela.or.jp
HP: http://www.jela.or.jp
郵便振替口座番号: 00140-0-669206
加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団